

森と山を足で巡る

## 朝日連峰 大越～鍋森～離森山～ 三足一分山

道の無い山と県境縦走。GWの二大テーマとして以前から続けてきたが、今年の寡雪により行先は極めて限定される状況となった。穴のあくほど何枚もの地図を眺めて「細くない尾根」「人の少ない山」「なかなか立てないピーク」を探し、たどり着いたのは、以前年末に縦走した赤見堂岳から紫ナデへ連なる稜線の更に北の部分である。ぜひここは月山か湯殿山からの縦走と行きたいところだったが、どんどん悪化する天気予報に計画縮小を余儀なくされ、当初広げた風呂敷の四隅を大きく切り取るようなルートになってしまった。ともかく静かな山で連休の喧騒とは無縁の3日間を過ごせることは確実ではないか、という期待は捨てずに久々の山形道へと車を走らせた。

【日程】

2016年4月30日(土)  
～5月2日(月)

【メンバー】

佐貫(Ⓐ)、棚橋

【地形図】

湯殿山、赤見堂岳

【記】佐貫

4月30日(土) : 曇り後晴れ、夕方から雨

4月頭に鍋森にスキーで行った記録からすると、既に大越川白土谷沢のスノーブリッジはなくなっているようだ。仕方ないので長い長い月山第一トンネルを越え、鶴岡側に出た先で引き返して反対側の車線沿いにあった大きな駐車スペースに車を置く。騒ぎになっても困るので、県警に計画書は提出済みだが一応ダッシュボードにも見えるように広げておいた。ここから背後の小尾根を越え、ちょっとした窪地を歩いて旧道の六十里越国道に上がる。空はどんよりして冷たい風が吹いている。地形図に「大越」とあるあたりで白土谷沢の源頭と梵字川の支流の源頭を分ける尾根に乗り、鶴岡と西川を分ける尾根を辿るというのが今回のルートである。そう、市町境ではあるが一応境界線を辿るのだ。いつの間にか空も青く晴れ渡ってきて気分がいい。小さな沢を挟んだ右奥の尾根には大きな反射板らしきものが設置されている。これが最後の人工物かと思いがらもう少し登ると待望の広い尾根に出て、進行方向がずっと残雪に覆われたたおやかな稜線が続いているのが見えた。ウッソー、と思わず声が出てしまうような白さと広さ、今年さんざん見てきたあの藪っぽい風景は何だったのだろう。これならスキーで来ればよかった…。

恐らく前日に降ったと思われる数cmの雪のお陰で、春には見ることもないような真っ白い雪面が続く。点在するブナの大木が良いアクセントである。2～30mのアップダウンが多くてずっと歩いているのにあまり標高が変わらないという若干修行チックな面もあるが、とにかく天気と景色は最高なので文句のつけようがない。1162.2mの標高点は地形図には記載がない「北沢山」と呼ばれているらしいが、ここからいよいよ近くに見える鍋森は逆ザピエルというか、山頂付近だけが黒い藪のようだ。雪が落ちるほど急には見えないのに、どうしたことだろう。梵字川の源頭から山頂北側を巻いてしまえば藪は避けられるが、ピークハンターの棚橋さんの強い要望により山頂を踏むことになった。何の木だかわからないが背丈くらいの結構密な灌木と笹の混じった藪で、山頂に登って抜けるまで全部で15分ほどを要した。この頃から次第に空が重苦しい色になって来る。

離森山は梵字川源流を囲む尾根から文字通り少し離れた位置にある。鍋森から眺める姿はきれいな左右対称の△だが、決して鋭鋒とはいえない。鍋森と比べればずんぐりしていないのでこちらにだけ「山」がついているのだろうか？まだ時間も早いので、尾根の分岐に荷物をデポし今日中に往

復することにした。雪割れが目立つ尾根を注意しながら登り山頂に立つ。朝日連峰の核心部は遙か遠い。8年前に大朝日で亡くなった矢本さんに合掌する。

荷物まで戻らないうちに、雨粒がパラパラと落ちてきた。明日は停滞する可能性が高いので風雨を避けられる幕場を探さねばならない。小沢の源頭はとても魅力的なゆるやかさだったが、どうも今日に限っては風向きが芳しくないようだ。あちこちロケハンしようにも既に降り出しているので適当な場所で手を打つことにする。テントに入る頃にはもう風も雨も本格的になる一歩手前という感じだった。

### 5月1日(日) 雨

夜の間ずっとテントを雨が叩く。比較的新しいゴアのテントなので大丈夫なはずなのに、あろうことか入り口がパネルでなく厳冬期同様に吹き流しのままになっていて、絞ったところから隙間やドロコードを伝った水の侵入が絶え間なく続く。一応予定通りの時間に起きたが雨は止む気配がなく、とりあえず午前中の停滞は確定。二度寝を決め込む。

昼近くになって再び起き、テントの隅にたまった水の排水作業をする。一回当たり1リットル近くか。そのうちエアマットがプカプカ浮いてくるんじゃないかと思ってしまう。さすがに長すぎる睡眠をとっているのが午後はテント内で座ったまま過ごすのが、いくら通常はスペースに余裕があるテントでも24時間以上中で過ごすのは過酷すぎる。雨がやまないのが終日停滞を決め、更に12時間近くの幽閉生活が確定した。動いていないのにこんなに身体に負担のかかるGW山行は初めてだ…。

### 5月2日(月) 曇り時々小雨

今日は三足一分山を踏んで車まで戻りたい。早出するが、いきなり尾根を誤り20分ほどロス。三足一分山まではアップダウンはあるものの基本的には標高を下げて行くため、尾根の藪化が少々心配だ。ワンポイントでちょっとした藪を横切る箇所がいくつか現れ、その度に迷路のように右へ左へと雪を拾いながら抜けていく。ちょうど中間くらいのc1202.3までは概ね雪がつながっているのが最初から分かっていたが、ここに立つとその先もそれほど黒い場所がないのが分かり安心した。

三足一分山は、直前の小ピークから一度数十m下って登り返した先にある。正確には登り返した所から更に進み、尾根が急降下を始める直前の船の舳先のような場所が山頂ということになっている。さて三角点はどこに？ ずっとたおやかだった尾根が急に梵字川に向かって崖のような落ち込みを見せているあたりが怪しい。低灌木の藪をガサガサやっても石柱は見当たらず。もっと手前かな？ と戻ろうとした時、笹藪の足元に緑色のコケが生えた三角点を発見した。地面の色と同化しかけていたので分からなかったのだ。「道のない山」コレクションに一座追加、ブラボー！

証拠写真を撮影し、急いでテントに戻る。途中でまたもや雨が降り出し、帰りはビショビショかと思われたが、強まることはなくホッとした。普通は同じところに戻る場合、帰りの方が短く感じる人が多いものなのに、天気の良いせいかむしろ長く思える。前日の雨がそこそこまとまった量だったので、行きには全て雪で覆われていた尾根のごく一部は地面が露出している。車まであと1/4くらいとなった場所では真新しい熊の足跡が点々と残されており、いかにもまだその辺をウロウロしてますよといった感じである。かなり大きな掌で身体も相当大きい個体と思われるので、遠目に目撃するのはいいけれど遭遇は勘弁、写真を撮ってなるべく急いでその場を立ち去った。

山菜でも採れないかと思って歩いてはみたものの、まだまだそんな雰囲気ではない。車に戻るま

で結局行程の98%程度は雪の上を歩くことが出来たようだ。短い日程、しかも往復ルートになってしまったことを残念に思う気持ちがあったが、今年の中で奇跡的に残雪の山歩きが出来た嬉しさはそれに勝った。下山後は大井沢で温泉につかり、石井さんお勧めの民宿で一泊。山のごちそうでGWの山行を締めくくることができて、めでたしめでたし。

### 【三足一分山という山名について】

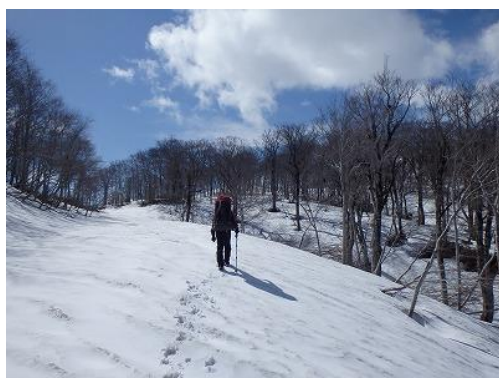
正直なところ山頂というよりも尾根の一部という感じで、なぜわざわざここに山名がついているのかと不思議に思うような場所にある。「荘内地名辞典」には『仙台藩に売分山という制度があり、三ヶ二売分山は植林して売るときに、一公二民に分けたという。このような慣習による山名であろうか。』とあるが、売分も一公二民も「三足一分」とは響きが異なり、私のお粗末な頭ではどうも理解できずにいる。川内の五剣谷岳は五軒長屋のような形状からゴケンヤと称されたとも聞かすが、この山に関しては形を見ても同様の連想は働かず、謎は深まるばかりだ。

### 【行程】

4/30 月山第一トンネル鶴岡側出口パーキング (7:50) ~112号旧道大越(9:20/30)~鍋森(13:35)~離森山 (14:30) ~c1(12:55)

5/1 終日停滞

5/2 c1(4:55)~三足一分山(7:30/40)~c1(9:10/25)~大越(12:45)~駐車地点(13:45)



雪に覆われた国道 112 号旧道



スキーで来ればよかった！



離森山に立つ



真新しい熊の足跡

大越～鍋森～離森山～三足一分山 概念図

作図： 佐貫

